http://commonf.net　E-Mail:jimukyoku@commonf.net

茅風

Breeze from the field of thatch-grass

2022年３月７日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信６５号

雲越萬枝師匠による茅刈り講習(10 月 30 日)

目　次

■ 10 月～2 月の活動報告(事務局)・・・・・・・・・・・・・・・・・1
■ 2021 定例活動⑥・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
「茅刈り」
◆開催報告(草野　洋)
■ 2021 定例活動⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
「茅出しと山の口終い」
◆開催報告(草野　洋)
◇感想文(梶原　萌)
◇写真(沖　浩)
□ 青水トピックス二題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
「おにやんま模型の贈呈式」
「群馬県森林ビジネスコンテスト入選！」
■ 下流部会活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
◆生石高原で茅刈り交流(稲　貴夫)
「むすびや弥右衛門茅葺プロジェクト」訪問
■ 流域連携活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
□ 藤原だより(北山　郁人)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
■ 野守のつぶやき(清水　英毅)・・・・・・・・・・・・・・・・9
編集後記（敬称略）

2021.10～2022.2 の活動報告

【１０月】

● 茅の引取先である町田工業より、コロナ禍による文化財修復事業の停滞で茅が余剰となり、引き取りが困難との連絡あり。茅葺文化協会に他の活用方法などを相談。

● 30日、31日 茅刈り実施。みなかみ町民2名、ほか群馬県民6名を含む33名が参加。

【１１月】

● 茅葺き文化協会の紹介で、新たな茅の引取先である千葉県鴨川市「ちいさな地球」と打合せ。

● ５日　茅風６４号発行　全８頁

● ９日　上ノ原に強風が吹き荒れ、茅ボッチが多数倒壊する。茅出しに備え、直ぐに茅刈り衆や自伐林業グループ、首都圏のメンバーがで立て直した。

● ２０日、２１日　茅出し・山の口終い実施、２０名（会員１４、会友６）が参加し、約４千束を曳き出す。一部（９７５束）は新たな引取り先の「小さな地球」のトラックに積み込み、残りは現場に仮置きとした。
２０日夕食後に車座講座開催、会友の河辺さんから「みつばちの話」。

● ２８日　上ノ原に仮置きの茅ボッチを降雪から守るため、自伐林業グループが茅ボッチをトラックで搬出し、天日干しの上、町役場の協力で矢倉倉庫(ダム事務所あとの倉庫)に格納。

【１２月】

●３日、６日　有志６名で他団体交流ツアー実施。和歌山県生石（おいし）高原「むすびや弥右衛門茅葺プロジェクト」の茅刈りイベントに参加し、古民家「志高庵」で交流会実施。

●１４日　ゆるゆの森でのリトリート活動を素材に応募した「ぐんま森林ビジネスコンテスト」が入賞。この日、群馬県庁で行われたプレゼンテーション及び表彰式に塾長以下三名が出席。

【１月】

●２２日、２３日　流域連携プログラムとして、茨城県の小貝川、菅生沼での野焼きに、両日で延べ１０名が参加。

（以上）

晩秋の上ノ原
撮影　沖　浩

■2021定例活動⑥
「茅刈り」　　報告　草野　洋

原因がはっきりしないものの新型コロナウイルスの感染者が急激に減少して、やや安心安全な日常が戻ってきた感がある 10 月 30､31 日に茅刈を実施しました。当日は絶好の茅刈日和に恵まれ、相変わらずの美しさを見せる紅葉がの中で、日帰りを含めて 34名が参加(初参加 3 名)。久しぶりの懐かしい顔ぶれもありました。

まずはスタッフや経験組に倣いながら自分が使う鎌を研ぎ、始まりの式を終えて雲越萬枝師匠の指導で茅の刈方、ボッチのつくり方の茅刈講習会。レビューのために萬枝さんの指導ポイントを挙げます。

①群生して茅の穂が出ている育ちのいいところを狙い、そこに向かって刈進む。②キツネガヤは刈らない。刈る前にオミナエシ、ハギ、ヨモギなどの雑草（ゴミ）をあらかじめ取り除いておく。③刈るときは抱え狩り（稲刈りのようなつかみ狩りでは能率は上がらない）④二抱え（個人差あり）ぐらいで一束にして、ほかのやわらかそうな茅で縛る（縛り方の説明は難しいので省く）。⑤縛る場所は根から穂を除く全長の 65％ぐらいの高さで縛ると束が立ちやすい。⑥束が一つだけでも自立できなきゃダメ。⑦5 束を一ボッチにするとき丈夫そうな束を斜面の下の方に置き、斜面の上方から抱きかかえて同じ束の茅（身内）をクロスさせて前で結ぶ。⑧穂のところも手前からクロスさせて身内結び。⑨最後に各束を少し広げて安定させる。

上　鎌研ぎ
下　萬枝師匠によるボッチづくりの講習

以上ですが、文章で説明するのは難しいので実際に見てやってみるしかありません。この講習を受けて、参加者はそれぞれ散らばって茅刈。塾のスタッフの同行や、見回ってアドバイスしました。

茅の中に潜り込み、いい鎌音を立てながらひたすら刈る

今年のススキは生育が良くまとまっていて刈りやすいので品質の良い茅束が期待できます。

１５時には、みなかみ町役場の高橋さんの差し入れのリンゴをおいしくいただき、16 時に終了。

この日の宿はロッジ「とんち」相変わらずの美味しい料理でした。

夕食の後は、西村幹事の車座講座「奄美大島・徳之島・琉球の世界自然遺産登録の経緯と効果」についてわかり易い解説がありました。

2 日目は、今年は茅刈検定の受検者がなく皆さん早速茅刈に従事。正午前に終了。

それぞれに作った茅ボッチ数に応じてボッチ券を渡すと、それを使って地物の新鮮な野菜などを買い求める参加者で移動販売車の周りは盛況でした。（写真・右）

2 日間の茅束の数は 134 ボッチ（670 束）となり、用意したボッチ券が足りず急遽、幹事に渡した券を買い上げて間に合わせました。

また、この後 11 月 2 日まで有志６名が古民家に合宿して茅刈りを続け 80 ボッチ以上を刈りました。

■2021定例活動⑦
「茅出しと山の終い」　報告　草野　洋

今年最後の活動は、茅ボッチを道路端まで曳きだして集積、トラックに積み込む茅出し作業です。

今年の茅ボッチの数量は、10 月の茅刈りイベント、地元茅刈衆、茅刈り合宿を合わせてると約 800 ボッチ（4000 束）になりました。ところが今年は、コロナ感染症の影響で、行政の文化財修復事業が思うように進まず、納品先の町田工業が茅束の在庫を抱えている状況から、日本茅葺文化協会の上野さんに新たな引き取り先について相談したところ、千葉県鴨川市で古民家修復を計画している一般社団法人「小さな地球」という団体が一部を引き取っていただけることになりました。

今回の参加者は20名。1 日目は山之口終いの神事(写真・右)を行い、早速ボッチの曳き出しに取り掛かりました。

茅ボッチは11月9日の上ノ原一帯に吹いた突風で大方が倒れましたが、茅刈衆と自伐林業&藤岡チームが起こしてくれたおかげで良く乾燥して軽く、茅の成長も良く、刈り手の腕も上がって運びやすい茅ボッチとなっており比較的短時間に曳き出しが終わりました。重労働の曳き出しですが今年は少し楽でした。

3 時には野点もおいしくいただきました。快く引き受けていただいた駒井さん、西山さん、美坂さん有難うございました。

休憩後、到着したトラックに積み込みましたが高速を走るため、思った以上に積むことができません。茅の輸送は今後の課題です。

左　　茅の曳き出し
左下　野点
右下　積み込み作業

この日の宿は樹林、夕食の後、場所を遊山館に移して車座講座を開講。語り部は河辺さんでタイトルは「ミツバチのはなし」。河辺さんは渋谷にある洋菓子店で養蜂を担当し、会社の屋上で愛情を注ぎながら蜂を育てています。沢山の写真を使って、賢く社会性をもつミツバチの生態をわかり易く解説してくれました。参加者の皆さんは初めて聞くことばかりで、すっかりミツバチのとりこになってしまったようです。

2 日目はトラックの到着を待つ間、みんなで茅場の後背林「ゆるぶの森」を散策しました(写真・右)。すっかり葉が落ちて明るくなった森の中を落ち葉を踏みしめ、その音も楽しみながらゆっくり歩きました。この森はミズナラ、コナラ、ミズキ、トチノキ、シナノキ、オオヤマザクラ、イタヤカエデ、ブナなどの多様な樹木が茂り、藤原崩れ、黒ボク土、キノコ、湧水、動物の痕跡、林業・木材などのインストラクションのネタも満載です。今回は、茨城自然博物館の小幡さんから植物ネタを解説してしていただきながら、中味の濃い散策となりました。そのおかげでこの森の豊かさを再認識しました。

昼前に小さな地球の代表の林さんが運転するトラックが到着し、みんなで積み込み作業に取りかかりました(写真・右)。小さな地球に嫁入りした茅ボッチは 1 日目が 80、この日が 115、合計 195 ボッチ（975 束）です。

小さな地球と青水は、活動の趣旨や内容が共通していて親しみがあり、これからも交流していくことになるでしょう。早速来年 9 月に茅葺をする計画があるとのことで、今から嫁ぎ先の訪問が楽しみです。

上ノ原には、萬枝師匠から「いい茅でみんなの腕も上がった」と褒めて頂いた茅ボッチが 3000 束残りました。引受先を待つばかりです。

～上ノ原での貴重な体験～

梶原 萌

普段は兵庫県のあまり土や緑のないところで暮らしているので、『土不足、山不足、緑不足…』と日々思っていました。そんなとき、友人から森林塾青水さんのことを紹介してもらい参加すること にしました。

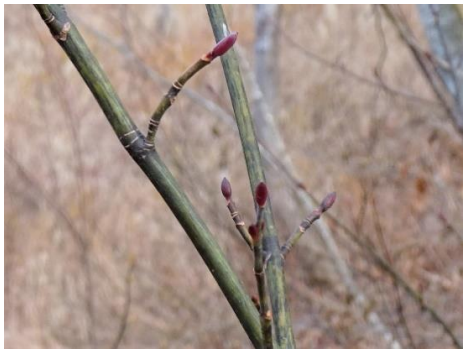
傾斜のある草原の中を行ったり来たりして茅ボッチを運ぶのは、普段あまり動かない体にはちょっとしんどい作業でしたが、植物や山々を見ながら体を動かすのはとても気持ちよかったです。「茅が水分を含んでいて重い場合もある」とか「雪が降る中で茅出しした年もある」とお聞きしたので、今年は茅ボッチがよく乾いていて天気も良くて「なんて素晴らしいコンディション～！」と 感謝しながら、茅ボッチをひっぱりました。

それから、作業の合間にお抹茶やお菓子をいただいたり、ゆるぶの森を散策してブナの実を食べたり（美味）、夜は呑みながら車座講座でミツバチの話を聞いたり、茅出し以外でも充実した２ 日間でした。参加する前に、経験者の友人から「茅刈りとかに比べると地味な作業だよ～」と言われていました。たしかに地道な作業でしたが、上ノ原の自然の中で過ごす時間は私にはとても貴重で良いものでした。

これからは茅葺の屋根を見かけたら、茅ボッチが立っている上ノ原を思い出すと思います。兵庫県から行った甲斐がありました。 新幹線代が貯まったら、野焼きや茅刈りにも参加してみたいです。

～ゆるぶの森でのひととき～

写真・文　沖　浩



２ 日目の午前は「ゆるぶの森」を歩いた。「ゆるぶ」には、自然豊かな森を歩くことでココロとカラダを緩めるという思いが込められている。上ノ原での活動の趣旨にぴったりの言葉で、万葉集にも出てくるという。ブナの幹にまだ新しいクマの爪あとと熊だなを発見。ツキノワグマが好物のブナの実を食べに来た痕跡だ。

■青水トピックス

○「オニヤンマ模型」の贈呈式

茅刈りを終えた 10 月 30 日の夕食後、ある贈呈式がありました。

青水の藤岡和子幹事は、神奈川県内の児童福祉施設放課後等デイサービスで働いています。そこで学ぶ、発達障がいのある小学 5 年生の翔太君は、紙で昆虫など生き物の模型を作るのが大好きです。それも、鉛筆で設計図から仕上げる本格派。

青水の会友である河辺穂奈美さんは、原宿にある洋菓子店の養蜂担当者。ある日、藤岡会員にこんな話をしました。ミツバチの天敵であるスズメバチは、養蜂家にとって困った存在。しかしスズメバチも、その天敵であるオニヤンマには敵いません。それで、オニヤンマの模型を巣箱の周りに吊るして、スズメバチからミツバチを守っている養蜂家がいるという話です。話を聞いた藤岡会員は、その場ですぐ翔太君の作ったトンボの紙模型の写真を、河辺さんに見せました。すると、また即答で「是非作っていただきたい」と話が進みました。

後日、藤岡会員がこの話を翔太君にすると、彼はオニヤンマの模型作りに取りかかりました。そしてオニヤンマの模型が完成。その模型を、実際にスズメバチ避けに使用することとなり、この日、藤岡幹事から河辺さんに贈呈されたのでした。翔太君は、得意な紙模型ではなく、プラスチック模型に初めてチャレンジしました。屋外で使用するので雨に濡れることがあるためですが、翔太君がオニヤンマの胴体部分に利用したのは、ヘアクリップでした。ヘアクリップ型オニヤンマの活躍が楽しみです。

贈呈された五頭の模型。専門家は一匹、二匹でなく愛着を込めて「頭」を使うそうです。

○「群馬県森林ビジネスコンテスト」入選！

～コモンズとリトリートを融合する〈コモンズ・リトリート〉を提案～

12 月 14 日、群馬県主催の「ぐんま森林ビジネスコンテスト」が群馬県庁で開催され、森林塾青水がアイデアの部で入賞しました。当日のプレゼンテーターを柳沼翔子が務めました。

内容は、森林塾青水が約 20 年をかけて再生してきた茅場とミズナラ林の入会地（コモンズ）である上ノ原（みなかみ町藤原）を、リトリートのフィールドとしても活用する「コモンズ・リトリート」の提案です。「日本人の自己肯定感の低さ」と「管理の行き届かない里山の荒廃」の両方を解決する取組として、群馬県各地にある森林利活用のモデルケースとして広げていきたいとの「野望」もアピールしました。残念ながら優秀賞は逃しましたが、森林塾青水の新たな展開に大きな一歩を記した 1 日となりました。

審査員の皆様から、以下のような講評をいただきました。

☆具現化しながら価値化を図っている、とても良い取り組み。リモートワークなど社会システムの変化を捉えながら推進してほしい。

☆自己肯定感をテーマとしているところが印象的。教育という分野で子ども向けや親子向けにも可能性が感じられる。また林業に携わっている人がナビゲートしてくれる安心感もある。

☆単発で収益を図ることより関係人口を増やす観点で、ソーシャルビジネスとしての可能性を感じるアイデア。関係人口増のプロセスを具体的に可視化していけると良い。自治体との連携が重要。

大変参考になるコメントをいただき、アイデアを現実にすべく邁進していきたいと思います。また、群馬県の山本一太知事も、群馬県をリトリートの聖地にしたいという思いもあり、今後、群馬県と連携しながら事業を進めていければと思っております。ソーシャルビジネスを一緒に考えてくださる方、里山再生に興味のある方、リトリートに興味のある方、ぜひお声がけください。

今回、皆様から大変貴重な機会を任せていただきました。心からお礼申し上げます。（報告・柳沼）

プレゼンテーションをする柳沼会員と山本知事からの木製の賞状。

このコンテストは、コロナ禍などを踏まえ、新たな価値を創造し、森林空間を健康や教育、観光に活用することを目的に募集したもの。アイデアの部 38 件、事業例の部の 12 件の 2 分野計 50 件の応募があり、この日は５件の入賞者が発表しました。

■下流部会活動報告
「生石高原で茅刈り交流」　報告　稲　貴夫

昨年１２月５日、草野事務局長以下森林塾青水の有志６名は、和歌山県・生石高原で行われた茅刈りイベントに参加し、主催者である「むすび屋弥右ヱ門茅葺きプロジェクト」のメンバーと交流の機会を得ました。茅刈りの他、世界遺産の視察等を通して学ぶことも多かったツアーのあらましを報告します。

１日目（１２月３日）

一行は南海電鉄の橋本駅に集合し、レンタカーで高野山へと向かいました。平安時代はじめ、弘法大師空海は峰々に囲まれた海抜九百メートル、総面積三十三万坪の高野山に、信権密教の霊場を開きました。我々はまず、高野山真言宗の総本山である金剛峯寺を拝観、他に金堂などの伽藍や高野山の地主神を祀る御社(みやしろ)、空海の御廟である奥之院などを二時間ほどかけてめぐりました。

金剛峰寺内の石庭（蟠龍庭・左下）と空海ゆかりの三鈷の松（下）

２日目（１２月４日）

午前中、丹生都比売神社を参拝。神社のあるかつらぎ町天野は、十三年前に森林文化協会が実施した「にほんの里百選」選定地の一つ。神社では昇殿参拝の後、社務所で宮司の丹生晃市さんより興味深いお話を伺うことができました。

・丹生都比売神社の歴史は古く、『日本書紀』神功皇后紀に登場する紀伊國の天野祝（あまののはふり）が当社の神官であった。

・高野山はもともと丹生都比売神社の神領地で、空海を高野山に導いたのが祭神の丹生都比売大神。

・以来、同社は真言密教の守護神として位置付けられ、こうした神仏関係が「紀伊山地の霊場と参詣道」

本殿鳥居と太鼓橋

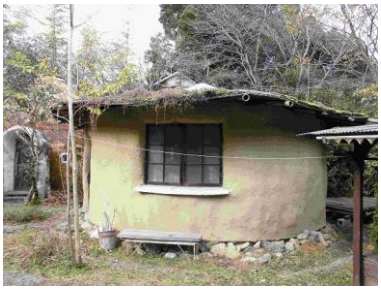
拝殿と後背林

として世界文化遺産に登録された。

・楼門とともに重要文化財に指定されている本殿は、春日造りとしては日本最大である。

話題は丹生都比売神社と高野山との深い関係から、杉の巨木が生い茂る境内林管理の問題まで及び、古代から現代に至る時代を越えたお話でした。

その後は生石高原への途中にあるリトリート施設、デュニヤマヒルへ。小高い丘の上に土や植物、石など自然の素材を使って建てたセルフビルドの施設が立ち並ぶ不思議な癒しの空間であり週末にはコンサートや演劇が催されているようです。（写真・上）



そしていよいよ生石高原へ。

高野山や天野の里への道と同じく、曲がりくねった山道を上がって突然開けた山頂部が生石高原です。この日も「茅葺きプロジェクト」のメンバーは作業をしていたので、我々は頂からの風景を楽しんだ後に現場へ移動。プロジェクト取り纏め役の豊原さんや和歌山大学の学生さんと一緒に茅束を運び出しました。

この日は紀美野町の農家民宿「四季の宿きみの」。移住組のリタイア夫婦が営んでいる宿で、夕食は山海の新鮮な素材を使った逸品。お酒も美味しくいただきました。

生石高原風景
寒風が吹き寒かった

３日目（１２月５日）

三日目はいよいよ茅刈り本番。この日は地元ロータリークラブによる茅刈りを我々がお手伝いする形で実施。参加者は全部で三十数名。最初に草野事務局長が茅刈りのやり方を説明。その後、３班に別れそれぞれに２名のメンバーが付いて指導しながら茅刈りを進めました。

ここでは刈った茅は結束器を使って束ね、一束ごとにロープで結束するという方法をとっていてボッチは作らないが、一束は上ノ原よりひとまわり大きい。３時頃に作業は終了し、この日の成果は６６束。

最上・和歌山ロータリークブから大勢の参加者
上左・茅刈指導
上右・茅の結束作業
左・茅束

後片付けの後は、途中夕食の食材の買い出しをしてから、今日の宿であるは「志高庵」に移動。高志庵は豊原さんが代表をつとめる「古都里」が運営する古民家ゲストハウスで、「茅葺きプロジェクト」の活動拠点でもあります。

このプロジェクトは、四年前に和歌山大学の「わかやま未来学副専攻」プログラムから生まれたもの。これは県内企業やNPOなどと協働して、地域の課題に実践的に取り組む教育プログラムで、その目的は、過疎などの深刻な地域課題の中で、逆に豊かな自然環境と文化資源を活用して、「わかやまの未来を切り拓く若者」を育成すること。

その協働メンバーである豊原さんが学生と共に取り組む茅葺きプロジェクトの目下の目標は、志高庵のあるかつらぎ町志賀地区に、地域の魅力を結集、

右・古民家ゲストハウス志高庵
右下・むすび屋弥右ヱ門茅葺ＰＴが造った茶室

発信する茅葺き屋根のおむすび屋さんをつくることです。そして、茅を生石高原から調達しながら、その美しい景観も守っていくことで、協働の関係を築いてゆこうとするものです。

この日の夕食は台所で学生と一緒に作ったものを総勢１２人でいただきました。学生さんとの未来思考の話が弾んだ楽しいひとときでした。

むすび屋弥右ヱ門茅葺ＰＴのメンバーはみんな情熱家

４日目最終日（１２月６日）

最終日は、天野産の酒米のみで地酒を醸造している酒蔵「初桜酒蔵」を見学し、ツアーを終了しました。（右・初桜酒造の銘酒）

様々な出会いと気づきに満ちた充実した四日間を過ごすことが出来ました。（写真提供　草野、藤岡、稲）

■流域連携活動報告
「小貝川・菅生沼の野焼き」　報告　稲　貴夫

昨年は新型コロナの感染状況から参加を見合わせた小貝川と菅生沼の野焼きが今年は予定通り開催。青水より５名ずつ参加しました。両日とも野焼き日和となり、気持ち良い汗を流してきました。

○小貝川の野焼き

１月 22 に実施された小貝川の野焼きは、河畔に生育する希少植物の保全を目的として、地元水海道の「自然友の会」の主催で開催しています。

当日は朝 9 時に参加者約 80 名が河川敷に参集し、友の会の的場会長他、関係者の挨拶に続いて、茨城県自然博物館の小幡さんが野焼きの目的や実施の手順、注意事項について説明。その後、小貝川右岸の 3 ヵ所を上流側から順番に野焼きを実施。充分に防火帯を整備した上で火入れしてゆきました。

左　　1 か所目
左下　2 か所目
下　　3 か所目

オギの生い茂る最初の場所はシムラニンジン、藪状の 2 か所目はヒメアマナ、柳の林内に火を入れる 3 ヵ所目はタチスミレと、それぞれ指標としている希少植物がありますが、最近はシムラニンジンが回復の兆しを見せているとのことでした。

昨年は地元関係者のみで野焼きをしましたが、2 か所目からは雨模様となり、充分な効果が得られなかったとのこと。今年は微風、快晴で順調に火入れ作業も進み、成果の期待できる野焼きとなりました。

〇菅生沼の野焼き

翌 23 日には菅生沼の野焼きが、隣接する茨城県自然博物館の主催で実施されました。河畔に生育するタチスミレ、トネハナヤスリ、ハナムグラ、エキサイゼリなどの希少植物の保全を目的に、関係団体と協力して実施していますが、昨年はコロナ禍のため中止となったため、二年振りの野焼きとなりました。

コハクチョウが越冬する菅生沼

9 時からの開会式では横山館長はじめ来賓の挨拶に続いて、博物館の小幡さんが野焼きの手順などを説明。その後、100 名を超える参加者が刈り払い機や熊手などを使って防火帯をつくってゆきました。

続いて、「田」の形に防火帯で 4 か所に区切られたオギの草原に順番に火が入り、順調に野焼きを終えることができました。

藤原だより−現地事務所報告−
「茅ボッチ救出作戦！」　北山　郁人

10 月末から刈った茅を 11 月半ば過ぎに茅出しした茅ボッチたち。例年であれば、このまま全て茅葺屋根の修繕のために地元の業者さんに持っていってもらっていました。

しかし、今年はコロナ禍で茅葺屋根の工事が進まず、茅の在庫の余剰が出てしまい引き取ってもらえない事態に。加えて予想より早く藤原に積もった 50 ㎝の雪。そこで、雪に埋もれて濡れてしまっていた茅ボッチたちを、一先ず藤原の屋倉にある倉庫に避難！晴れ間を狙って茅ボッチ救出作戦を実行しました。

約 3000 束の茅が上ノ原にあり、トラックたちが次々と山積みになります。ボッチの背は高く、湿っていて重く、トラックに積むのは大変ですが、雪山をバックに、茅ボッチが高々と積まれていく風景は美しく、どこか海外にいる様な気持ちになってきます。積み上がった茅の上で寝ている仲間を見ると、魔女の宅急便のキキを思い出しました。

救出した茅は、晴れてる間は天日干し、少しでも乾いた状態で倉庫にしまいました。早く引き取り先を見つけて、有効活用できるよう願っています。

■野守のつぶやき（22号）
～コロナ禍でも、夢ふくらむ恵みの森「上ノ原」

●2 年ぶりの茅刈り（2021 年 10 月 30～31 日）

・「楽しみは友垣集い茅刈る日」（青）　皆さん、どなたも 2 年ぶりの茅刈り。喜び勇んで鎌を研ぎ、思い思いの場所で鎌をふるいザックザク！初参加のAさん『周りの皆さんの茅を刈る音が聞こえて気持ちがよいです』とニコニコ顔！

・左は、茅場で見つかった鳥の巣。上原さんのお見立てはホホジロでは、と。周りが騒がしくなったので、一時避難中？ついでに、野鳥とカヤネズミの巣の違いを教えていただいた(^-^)

・右は、茅刈りの対価＝地域通貨“ボッチ”が使える地場野菜市場。即、完売！小生は、いつもの虎豆に食用ホオズキを追加。これが大当たり。フミ子さん、ご馳走様でした。

●「山の口終い」と茅出し（11 月 20～21 日）

・空模様の都合で、初日に「山の口終い」。十二神様にコロナの早期鎮静を祈願するも効き目なし。どうやら、管轄が違うらしい。

・写真（↙）は乾燥のため天日干し中の茅ボッチ。入会仲間の M 工業さんの車に乗せて初めて世に出る。重労働だが、この意義を承知の兵どもが集う一年最後の活動が茅出し。

ところがこの所、コロナ禍が元で重要伝建の工事がなくなり倉庫に茅が満載でこれ以上は引き取れないという。そこで、八方手を尽くして出会ったのが房総・鴨川の NPO 法人（H 代表）。地元古民家の再生に茅が必要との由。写真（左）はその積み込みの様子。聞けば、その活動内容・理念は素晴らしく、学ぶべき所大にて今後の交流がとても楽しみ。

●窮すれば通ず！？　かくして、上ノ原産の茅の新たな供給先（販路）が誕生した。かつても、縁あって仮設住宅の断熱材や畑のたい肥として使ってもらったこともある。屋根材としてだけでなく、壁材として利用している事例も都内で見聞した。要は、茅の今日的用途＝新たな供給先の開拓。茅ボッチの山を放置するわけにはいかない。向後の最優先課題としたきもの。

●百年後はブナの美林に！

・茅出しの後は、ミズナラ林の散策。“ブナ太郎”周辺の樹下では、皆さん嬉々として落果と落葉拾い。

・写真（↘）はミズナラ、コナラ、ブナの三種を並べた処。小幡先生に枯葉で遊ぶ方を教えていただいた後、「百年後にはブナの美林になります」とのご託宣！

・「若々しいミズナラの美林に」で満足と思っていたのに贅沢なこと！　でも、こちらの寿命が・・・・。

●小貝川の野焼き（2022 年 1 月 22 日）

・常総市の「自然友の会」が主催する河畔林の野焼き。地域の博物館や大学の知見を借りつつタチスミレ、ヒメアマナ、シムラニンジン他絶滅危惧種の保全が主たる目的。地元住民、それも親子連れが目立ちジェットシューター担いで参加していた。うらやましい限り。

・的場会長の開会挨拶「活動の成否は常総市民の文化度にかかっています。皆さん、頑張りましょう！」の一言が印象に残った。

・野焼き効果で冬眠打破。春の開花時期に合わせて観察会をやる由。ご案内が楽しみなこと。

野を焼いて心の炎鎮めけり　（青）　令和4年大寒

～編集後記～

昨年の茅刈りと茅出しは、感染症の流行の間隙に予定通り実施出来ました。ところが、二年間のコロナ禍で文化財建造物の修復事業が停滞し、今年は茅の受け入れ先がありません。しかし、新たに茅を活用してくれる団体が現れ、残った茅ボッチも雪に埋まる直前に、地元の連係プレーで避難先の倉庫に保管。これが茅の品質向上への工夫と意欲を掻き立てる契機ともなっています。また、リトリートの試みも大きく羽ばたきそうです。
困難に直面しても前に進んでいけるのは、地元をはじめ支援下さる大勢の関係者、会員会友、そして上ノ原の自然の賜物であると感じました。（稲）